



Title	ハイデルベルクにのこる西田幾多郎の書簡から
Author(s)	三谷, 研爾
Citation	独文学報. 2024, 40, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究ノート

ハイデルベルクにのこる西田幾多郎の書簡から*

三谷研爾

わたしが大学に入学した1980年前後は、両大戦間のヨーロッパの思想や芸術や文化を知識社会的な視角から分野横断的に検証する「1920年代論」がたいへん活発だった。

いったい戦後の人文・社会科学に突きつけられたもっとも重い課題は、なぜ、またいかにしてファシズム体制が出現し、国民的支持を集め、あれほどの野蛮と破壊を内外にもたらしたのかという問いかけであった。それは当然、自分たちはファシズムをまえにして、政治的のみならず思想的・文化的になぜかくも無力であったかという厳しい自己反省を含む問いでもあった。この問題をドイツに即して考える場合、それはまずヒトラー政権成立から第二次世界大戦の破局にいたる政治的・経済的過程を徹底的に検証し、ナチズム体制の実態を突き止める「1930年代論」として展開されたのである。

しかしながらナチズム体制は、先行する1920年代の不安定な政治・経済状況の帰結であり、つまるところワイマル共和国の社会・文化現象の総体と不可分である。それどころか19世紀末に淵源する知的地殻変動のうちにも根を張っていることが明らかとなった。じっさい世紀転換期以降、自由主義ブルジョワが主導する社会と文化にたいするラディカルな批判がさまざまに提起され、新たな社会勢力として登場した大衆の政治的・文化的動向が深く影を落とし、また躍進する科学とテクノロジーを応用した生活スタイルは激変した。それらを受けてワイマル共和国期に噴出した尖鋭で果敢な思想実験、政治と芸術の合作というユートピアの夢と幻滅、軽快かつ軽躁な消費文化の氾濫は、伝統的な学問区分によってはとらえきれない巨大なテーマ群だったのである。わたしが学生時代に接した

* 本稿は科研費による国際共同研究(22KK0004)の成果の一部である。またハイデルベルク大学所蔵資料の入手にあたり、ご協力いただいた同大学日本学科のハンス＝マルティン・クレーマ教授に深く感謝する。

1920年代論の活況は、そうした知的関心の発現にほかならなかった。

そのなかで、とりわけ目配りの広さにおいて他の追随を許さない書き手が生松敬三である。わたしは、このすぐれた思想史家の著作を読みふけたが、そのうちの一冊に『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』があった(※1)。行文は平明ながら、都市文化史と思想史に関する著者のきわめて該博な知識が惜しみなく盛り込まれた好著である。そして「ハイデルベルクと日本人」と題されたその最終章では、1920年代に同地に留学した知識人たちの足跡がスケッチされていた。

1928年生まれを生松を含む戦後知識人の第一世代にとって、1920年代のドイツでの留学経験をもつ学者たちは恩師の世代である。戦後の混乱のなかで学生時代を送らざるをえなかった生松たちにすれば、大正期の教養主義的風土に育った恩師世代のハイデルベルク経験は、神話的な後光を放っていると同時に、完成期の旧制高校エリートの恵まれたキャリア形成過程を見せつける、どこか縁遠いものであったにちがいない。最終章における生松の筆致に混じるいささか苦くノスタルジックな調子は、そうした屈折した思いのなせるわざだろう。

*

1920年代にハイデルベルクに滞在した日本人留学生には、人文学・社会科学の研究者が多い(※2)。それ以前、とりわけ明治期のドイツ留学者の専門分野は、法学や国家学なども含まれてはいたものの、医学、生理学、物理学、化学などの自然科学分野が中心だった。だが明治末年以降、知識人青年のあいだで人格主義や教養主義への傾斜が強まり、また他方で大学や旧制高校の増設・拡充が図られるなかで、人文・社会系分野の研究者の留学は顕著に増加した。その留学はたいいてい官費によるもので、すでに高等教育機関で教職に就いていた30歳代半ばの学者が、帰国後の昇任や転任を見越して、海外での研究経験も身につけておくために「洋行」したのである。その留学期間はせいぜい1年ないし2年で、しかも英独仏を中心に複数の滞在先を回る場合も少なくない。漱石がロンドンで、鷗外が

1 生松『ハイデルベルク ある大学都市の精神史』(TBS ブリタニカ 1980年)は、1992年に講談社学術文庫の一冊として再刊された。本稿ではこの講談社版に拠る。

2 Vgl. Mitani, Kenji: *Japanische Intellektuellen am Neckar. Zu ihrem Heidelberger Studium in den 1920er Jahren*. In: *Dokubun gakuho* [『独文学報』], Bd. 39 (2023), S. 7-21.

ベルリンで体験した留学は、もはや過去のものであった。

ハイデルベルクは、物情騒然たるワイマール共和国の首都ベルリンから遠く離れ、眼を奪うような刺激的な大衆消費文化とも無縁の静かな大学都市だから、留学者たちの生活もまたおのずと、大学を舞台にした研究者ネットワークのなかでほぼ完結していた。第一次世界大戦後のドイツを襲った歴史的インフレーションが、戦時特需で潤った日本からの留学者にきわめて有利に働いたことも、つとに知られている。そうした彼らの経験は、日記や書簡、探訪記、さらには後年の回想録からそれなりに再構成できる。北吟吉の『哲学行脚』(※3)、阿部次郎の『游欧雑記 独逸の巻』(※4)や日記・書簡、石原謙の『学究生活の思い出』(※5)、三木清の『読書遍歴』(※6)などはかねて参照されてきた情報源である。上述の生松敬三の著書も、その最終章の下敷きになっている加藤将之『ハイデルベルクの神話』も(※7)、これらのテキストを素材としている。他方、日本人留学者にかんするドイツ側のまとまった証言としては、若い時代を哲学者リッケルト Heinrich Rickert (1863-1936) の身近ですごしたヘーゲル研究者グロックナー Hermann Glockner (1896-1979) の回想録があるのみだった(※8)。

日独双方とも材料は出尽くしたと思われたところに出現したのが、日本学者ザイフェルトの主導によってハイデルベルク大学でおこなわれた共同研究プロジェクトである。ザイフェルトたちは日本人留学者の学籍簿などハイデルベルク側に残る資料をあらたに発掘し、日本側の先行研究を補完するかたちで、1920年代の日独学術交流の検証を試みた(※9)。なるほど学籍簿や学籍登録時に提出された

-
- 3 北吟吉『哲学行脚』、新潮社 1926年。「リッケルトを中心として」「ハイデルベルクの思い出」のふたつの章で、同地での滞在経験が詳述されている。
 - 4 初出は1933年(改造社)、のちに『阿部次郎全集』第7巻(角川書店 1961年)に収録された。同全集では第14巻と第15巻が日記、第16巻が書簡に当てられている。
 - 5 初出は1959年(石原謙先生文集刊行会)、のちに『石原謙著作集』第11巻(岩波書店 1979年)に、他の回想とともに収録された。
 - 6 初出は雑誌「文芸」1941年6月号～12月号、本稿では『三木清全集』第1巻(岩波書店 1966年)に拠る。
 - 7 加藤将之『ハイデルベルクの神話 新カント派時代万華鏡』、短歌新聞社 1972年。未見だが、同じ著者には『ハイデルベルクの散歩』という随想集もある。
 - 8 Vgl. Glockner, Hermann: *Heidelberger Bilderbuch: Erinnerungen*. Bonn: Bouvier 1969.
 - 9 Vgl. Wolfgang Seifert (Hg.): *Japanische Studenten in Heidelberg. Ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren*. Heidelberg: Verlag Regionalkultur 2013.

志望動機書などは、留学生ひとりひとりについてみれば僅かな情報を追加するものにすぎない。しかし、彼ら留学生のトータルな動向が明らかになれば、これまで神話化されてきた日本人のハイデルベルク留学をよりリアルに描出できるのではないか。ザイフェルトの仕事を契機にしてその方向をさらにすすめたのが久野譲太郎である。日本政治思想史を専門とする久野は、芥川龍之介の親友としても知られる法学者恒藤恭のハイデルベルク留学を検討したことをきっかけにこのテーマに着手し、ハイデルベルク大学文書館に残存する正規登録学生資料の系統的調査に取り組んでいる(※10)。

*

コロナ禍が始まる前年の2019年、わたしは交換教授としてハイデルベルク大学日本学科で授業を担当しながら夏学期をすごした。そこでたまたま久野と知り合ったわたしは、誘われるままに1920年代にこの大学都市に滞在した日本人留学生たちについてあらためて考えてみるつもりになった。そのさい、かつて熱心に読んだ生松敬三の仕事が想起されたのはいうまでもない。そしてコロナ禍がようやく下火になりはじめた2022年夏、わたしたちは日本学科スタッフの協力を得て共同研究をスタートさせたのである。

大学文書館に残る学籍簿や授業登録者リストなどの調査は久野の独壇場なので、わたしは自分なりのアプローチを工夫しなければならない。そこで思いついたのが、当時多くの日本人留学生を惹きつけていた教授たちの遺稿や遺品の探索である。ヨーロッパの場合、高名な学者の旧蔵書や遺稿などが、大学図書館にまとめて収蔵されることはよくある。19世紀後半以降、ハイデルベルク大学はドイツを席捲した新カント派哲学の拠点のひとつであり、その立場が日本におけるアカデミックな西洋哲学研究の基盤になったことはよく知られている。三木清の回想にあるとおり、日本における新カント派哲学は明治末年から大正期にかけて

10 Vgl. 久野譲太郎「ヴァイマル期ハイデルベルク大学への日本からの留学状況とその歴史的背景」、*Bunron. Zeitschrift für literaturwissenschaftliche Japanforschung*. Nr. 8 (2021), S. 230-274. 久野はこの論文をさらに補訂し『ヴァイマル期ハイデルベルク大学の日本人留学生：在籍者名簿および現存資料目録』（科研費成果報告書、2022）にまとめている。

まさに「全盛時代」を迎えていた(※11)。じっさい、ハイデルベルクをめぐした留学者たちは専門のいかにかわらず、この学派の領袖リッケルトの講義室につめかけたのである。リッケルトは演習を自宅でおこなっていたので、授業を機縁にして彼の個人的知遇を得た留学者もすくなくない。また第一次世界大戦後の経済的混乱のさなか、リッケルトの周囲の若い哲学徒が日本人留学者の個人的チューターを務めることで糊口をしのいだ事例も多く伝えられている。そういう状況からして、リッケルトの覚え書きなどが残されていれば、留学者との交流の痕跡を検出できるかもしれないと考えたわけである。

オンラインカタログの検索から、リッケルトの遺稿類がハイデルベルク大学に所蔵されていることは容易に判明した。主たるものは彼の各学期の講義ノートと思われるが、それ以外に私信も含まれていた。それら私信のうちに、わたしは日本から届いたものを若干見いだすことができた。差出人の多くは、三木清や北畠吉などの回想にもその名が見えるハイデルベルク留学経験者である。姓だけでは誰かわからない人物も含まれている。そこにさらに予期せぬ名前——K. Nishida——を見つけたときは驚いた。むろん西田幾多郎にちがいないからだ。

この西田のリッケルト宛書簡の存在がすでに縄田雄二によって報告されていたことにあとから気づいたのは、いかにも事前リサーチ不足だったというほかない(※12)。縄田はオンラインカタログの丁寧な検索によりマールバッハ文学資料館所蔵の森鷗外と山本有三の書簡、さらにハイデルベルク大学所蔵の西田の書簡を発掘し、とりわけ山本有三についてはキットラーのメディア論と関連づける比較文学的な知見を提示していた。本稿は彼のこうしたデータ発掘作業の成果もふまえつつ、1920年代のハイデルベルクにおける日独交流という観点に照らして西田のリッケルト宛書簡をめぐるコンテキストをあらためて読み解いてみたい(※13)。日本から届いた手紙の内容は定型的な時候の挨拶、寄贈書への返礼、近況報告が

11 三木『読書遍歴』、398ページ。

12 縄田雄二「マールバッハとハイデルベルクに見出された日独交流資料——森鷗外・西田幾多郎・山本有三」、『文学』第12巻6号(2011)、岩波書店、171-195ページ参照。

13 ハイデルベルク大学図書館には、リッケルトの同僚だった哲学史家ホフマン Ernst Hoffmann (1880-1952) に宛てた西田の書簡も残っている。この書簡については縄田「西田幾多郎のエルンスト・ホフマン宛ドイツ語書簡」、『点から線へ』第59号(2012)、石川県西田幾多郎記念哲学館、124-132ページ参照。ホフマン宛の書簡には三木清や大峽秀栄などからのものも含まれている。

中心なので、むしろ書信をとりまいていた文脈に光を当てることが不可欠と考えるからである。

*

西田からリッケルト宛てられた書簡は2通残っている。ひとつは1924年9月22日付の手書き、もうひとつは1930年10月9日付のタイプ打ち、発信地はともに京都である。岩波書店刊の新版『西田幾多郎全集』（2002-09）は第19巻から第23巻までが書簡にあてられているが、欧文のものはフッサール宛の1通しか含まれていない（※14）。リッケルト宛の書簡については、西田の日記から1924年9月22日付は確認されるものの、1930年10月9日付についての言及はない。以下、西田の書簡本文ならびに私訳を示す（※15）。

a) 1924年9月22日付書簡

Kyoto, den 22. Sept. 1924

Sehr verehrter Herr Professor

Empfangen Sie meinen herzlichsten Dank dafür, dass Sie mir Ihre wertvolle Abhandlung „Das Eine, die Einheit und die Eins“, die als das erste Heft der Heidelberger Abhandlungen erschienen ist, verehrt haben. Diese Abhandlung hat mir schon früher viel Nutzen gebracht, wie überhaupt jetzt Ihre Werke von meinen Landleuten viel studiert werden und ihre Philo[so]phie bei uns Epoche gemacht hat. Besonders aber dankbar ist Ihnen unsere philosophische Welt für Ihr Werk „Der Gegenstand der Erkenntnis“, da es dem hier nach und nach mächtig gewordenen Psychologismus den Garaus gemacht hat, und weiter für Ihre „Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung“, die in ihrer Tief-

14 『西田幾多郎全集』第20巻、岩波書店 2006年、126ページ。これは1925年5月20日付のもので、フッサールの往復書簡集からの転載である。Vgl. Husserl, Edmund: *Briefwechsel*. Bd. VI. Hg. v. Karl Schuhmann. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers 1994, S. 307.

15 前掲の縄田論文（2011）にはこれら2通の複写画像が掲載されている。同論文182-184ページ参照。

gründlichkeit eine feste wissenschaftliche Grundlage für die Eigentümlichkeit jeder Kultur bedeuten.

Zum Schlusse möchte ich Sie höflichst bitten, mein „Intuition und Reflexion im Selbstbewußtsein“ als eine bescheidene Gegengabe gütigst annehmen zu wollen.

Indem ich Ihnen und Ihrer werten Familie alles Gute wünsche, bin ich mit dem Ausdrucke vollzüglicher Hochachtung

Ihr
sehr ergebener
K. Nishida

親愛なる教授、

ハイデルベルク論集第1集として刊行された貴論『一者、統一、一』を惠贈いただき、心よりお礼を申し上げます。わたしにとってこの論文は、つとにたいへん有益でした。そもそも今日、先生の著作はわが国の同胞たちによって活発に研究されており、そこに示された哲学はわたしたちにとって画期的なものです。わが国の哲学界は、とりわけご高著『認識の対象』に恩恵をいただいています。同書は、当地でしだいに有力になっていた心理主義の息の根を止めるものだったからです。さらに、『自然科学的概念形成の限界』からも恩恵をいただいております。こちらは、それぞれの文化の固有性の確たる学問的基盤をその根底において明らかにするものであります。

最後になりましたが、ささやかなお返しに拙著『自覚における直観と反省』をご高覧いただきたく存じます。

心からの敬意を込めて先生ならびにご家族のご多幸をお祈り申し上げます。

敬具
西田幾多郎

西田のこの書簡にたいしてはリッケルトからの返信が残っている。来翰は読み捨てにする習慣だった西田にはきわめて珍しいケースである。同年10月31日付の

リッケルトの書簡は、のちに下村寅太郎によって訳出紹介されているので、その主要部分をあわせて引いておく。

9月22日付貴翰に対し心からのお礼を申し上げます。それによって、私の諸著作が日本で読まれていることのおそらくまず第一に負うている方と直接に個人的なつながりをもつに到ったことは幸甚の至りであります。私は、貴下の弟子の範囲がいかに大であるか、そして貴下が貴下の郷国においていかなる尊敬を受けていられるかを知っています。多くの貴国の人たち、特にドクトル三木と天野教授が私にそのことを談っていました。昨日頂戴した貴著『自覚に於ける直観と反省』に対しても心からのお礼を申し上げます。ただ私はそれを読むことをできないことが私の最も遺憾とするところであります。そのテーマは私の非常に関心をもつもので、特に貴方がそれを扱われる仕方を切に知りたいものであります。[……] (※16)

b) 1930年10月9日付書簡

Kyoto, den 9. Okt. 1930.

Sehr verehrter Herr Professor!

Nehmen Sie fuer das mir von Ihnen freundlichst gesandte Buch meinen waermsten Dank entgegen! Da ich augenblicklich mit einem Thema, aehnlich dem Ihrer hochinteressanten „Logik des Praedikats“, beschaeftigt bin, ist mir Ihr Werk doppelt willkommen, und ich hoffe, durch dasselbe viele Anregungen zu empfangen.

Indem ich Ihnen alles Gute, vor allem weitere volle Schaffenskraft wuensche, bin ich mit besten Grue[ß]en immer

Ihr

dankbarer

K. Nishida

親愛なる教授、

懇切にも恵贈いただいたご著書にあつくお礼を申し上げます。わたしは目下、頂戴したきわめて興味深い『述語の論理』に似た問題と取り組んでいますので、ご著書は二重にありがたく、多くの示唆をいただけるものと楽しみにしております。

先生のご多幸を、そしてなにより益々ご健筆を振るわれますことを、お祈り申し上げます。

敬具

西田幾多郎

*

上記2通はいずれも、リッケルトから贈られた著書にたいする礼状である。とりわけ1924年9月22日付は興味深い。この年、ハイデルベルク哲学論集シリーズの刊行が始まると、すでに1912年の『ロゴス』誌に掲載されていたリッケルトの『一者、統一、一』が、その第1集としてあらためて出された。再刊にあたってリッケルトは西田をはじめとする日本の哲学者たちへの献辞を添え、緒言でさらに具体的な説明を加えたのである(※17)。彼は、西田がはやくから自分の著作を論評し、ことに『認識の対象』(1892)を高く評価して、岩波書店から刊行された山内(中川)得立による翻訳(1904)に序文を寄せていることを承知していた。順調に版を重ねた同訳書は、リッケルトにいわせれば、ドイツ語原著以上に読者を得ているという。その後さらに『文化科学と自然科学』や『歴史哲学』などが訳出されたことも、むろん著者には大いに喜ばしかっただろう。かつてフライブルク大学在任時に指導した左右田喜一郎のことも思い合わせたリッケルトは、遠く離れた日本の哲学者たちとの交流をあらためて多とし、そうした事情にふれる謝

17 このリッケルトの緒言について三木清は1924年4月20日の羽仁五郎宛書簡で次のように報告している。「ハイデルベルクではリッケルトに逢った。[……] 例のHeidelberger Abhandlungenに出す「ロゴス」の論文の再刷は「日本の学者と友人」とに捧げ、その序文に西田先生と左右田さんとのことを書くとか云っていた。この序文が出来れば、印刷の前に私に一応みて欲しいと頼まれている」。『三木清全集』第19巻、岩波書店1968年、261ページ参照。なお三木は、この書簡の時点ですでにマールブルクに移っている。

辞を記した『一者、統一、一』の新装版を西田に贈ったのである。

このような日本の状況について詳細をリッケルトに提供したのが、続々とやってくる留学者だったことはいうまでもない。第一次世界大戦中は途絶していた日独学術交流が1920年に再開されると、先に述べたとおり、知識人の洋行があいついだ。西田のまわりでは山内得立、天野貞祐、成瀬無極、田辺元、三木清などがハイデルベルクあるいはフライブルクへ向けてつぎつぎ出発した(※18)。彼自身、「私は今独逸の友人に手紙をかくことが内地の友にかくよりも多い」というほどだったのである(※19)。リッケルトは西田への返書のなかで、日本での哲学研究の現況について天野貞祐と三木清から聞き及んだと述べているが、彼の講義室の前方数列を占拠するくらい多くの日本人留学者が集まっていたハイデルベルクでは(※20)、日本の学術情報はかなり容易に得られたにちがいない。

だがリッケルトが『一者、統一、一』1924年版の緒言で日本の哲学者に謝意を呈したのは、自著が好意的に受容されているからだけではなかった。ドイツでの思想潮流は第一次世界大戦を境目にはっきり変化し、リッケルトたち新カント派が唱導する価値哲学や文化哲学はもはや時代のアクチュアルな課題に相接しきれず、急速に色褪せつつあったのである。そうした現状への苦々しい思いが、リッケルトの視線をより強く西田たちへと振り向けたのだ。

今日のドイツでは、個々人のあり方からは独立してそれじたいとして存立し、人格を超えたものとして個々人に対峙してくる「事柄 Sache」への信頼が哲学から失われてしまった。あらゆるものは「世界観 Weltanschauung」というかたちで、個人に依存するか、もしくは集団が生きていくにあたって服する歴史的、民族的条件に依存しているというのだ。そうなると哲学のうちには、「客観的」な学知はありえないことになる。それどころか往々にして、そもそも学知について「……」知りたいとも思わないことになる。(※21)

18 遊佐道子『伝記 西田幾多郎』(西田哲学選集別巻1)、燈影社 1998年、293-298ページ参照。

19 山内得立宛書簡(1922年8月7日付)、『西田幾多郎全集』第20巻、岩波書店 2006年、40ページ。

20 滝川幸辰『随想と回想』、有斐閣 1948年、142ページ。

21 Rickert, Heinrich: *Das Eine, die Einheit und die Eins. Bemerkungen zur Logik des Zahlbegriffs*. Tübingen: Mohr 1924, S. VIII.

リッケルトがその横行を嗟嘆する「世界観」は、もともとデイルタイの用語である。だがここでは、彼の若い同僚ヤスパースの『世界観の心理学』(1919)の言葉を借りて、「たんなる学知にとどまるものではなく、さまざまな価値、生活形態、運命のなかに現れる、つまり体験された諸価値の序列として現れる」ものとしておこう(※22)。ヤスパースは、そうした世界観を宣揚する哲学を預言者の哲学と呼び、第一次世界大戦後のドイツにあらわれた「秘密集会」や「師弟関係」や「神智学的で心靈主義的な団体」などにその端的な姿を見いだした(※23)。そして、この種の世界観を求めてやまない意識ないし態度じたいの分析をめざすのが、心理学の担当者として迎えられていたヤスパースの立場だったのである。とはいえリッケルトよりも20歳年下で、多くのモダニズム芸術家たちと世代を同じくするヤスパースが、人間主体にとっての生や世界の全的意味を求める態度——思想的にはむしろ実存主義につらなり、芸術的には表現主義に親近する——に深い共感を寄せているのは否みがたい。だがそうした時代感覚は、世界観とは客観的で学問的な認識に媒介されておらず、つまるところ肥大した主観による世界把握にすぎないとするリッケルトには共有できなかったのである。

リッケルトの見るところ、この憂慮すべき傾向は戦前世代と戦後世代とのジェネレーションギャップに由来する。だが彼は、あらゆる世代間の認識のずれがそうであるように、それは時間とともに解消されるだろうという。むしろ懸念すべきは壮年者 *gereifte Männer* の知的動向の変化である。

彼ら[壮年者たち]は多様な民族的、歴史的文化をそれぞれその総体においてとらえ、それらはたんなる生命体と同じく、生成しやがて死滅する形成体であるという。それら文化のあいだには、さまざまな民族や時代を貫いて「普遍人間的」な文化の持続的発展が進行するという、事柄に関して[個別の文化や時代に]優越する共通特性は見いだされないというのである。そうであるなら学知もまた、さまざまに現れては消えていくものであって、すくなく

22 Jaspers, Karl: *Psychologie der Weltanschauungen*. Karl Jaspers Gesamtausgabe Bd. I/6. Basel: Schwabe 2019, S. 23.

23 Ebd., S. 25.

とも哲学において、いつまでも残りつづける唯一の学知というものは存在しないことになる。だからこれは「相対主義」と呼ばれる[……。](※24)

この発言は、普遍的なものの存立根拠を掘り崩す歴史主義的思考への批判だが、より直接的にはシュペングラー『西欧の没落』(1918/22)を念頭に置いていると思われる(※25)。シュペングラーは、世界に存在する8つの文化はすべてからく誕生-発展-成熟-死滅という生命史的变化をたどるというきわめて直観的な把握にもとづいて実証史学を拒絶し、ヨーロッパ中心の進歩史観を相対化する「世界史の形態学」を展開した。シュペングラーの類型論的でペシミスティックな文化史観は、人間の学的認識行為の普遍性と客観性に裏付けられた文化科学の正当性と意義を説きつづけてきたリッケルトからすれば、まったく学問的根拠を欠く空論だっただろう。しかしながら同書が、敗戦国ドイツのすくなく読者の心情にかなうものだったこともまた、まぎれもない事実である。リッケルトのいう壮年者をおおむね1900年前後に成年を迎えた世代と考えるなら、それはドイツ第二帝政の繁栄と世界大戦の破局という歴史の変動を身をもって生きた、とりわけ教養市民たちを指したにちがいない。

*

西田は、リッケルトの日本の哲学者たちへの謝辞を正面から受けとめて、返書の筆をとった。だがドイツの知的状況にたいするリッケルトの批評のくどりを、彼をはじめとする日本の学者がどう読んだかは分からない(※26)。なるほど日本でも1918年以降、米騒動や戦後恐慌が発生し、また関東大震災にみまわれる一方、普通選挙運動が高揚期に入るなど、第一次世界大戦後の社会的変化は顕著

24 Rickert: a. a. O., S. VIII.

25 Vgl. Spengler, Oswald: *Der Untergang des Abendlandes. Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*. Bd. 1. Wien: Braumüller 1918. / Bd. 2. München: C. H. Beck 1922.

26 同じくリッケルトからこの『一者、統一、一』を贈呈された三木は羽仁五郎宛書簡(1923年7月31日)で、その内容を高く評価する一方、「序文の中に現はれてゐる Eitelkeit については私は唯微笑をもつて答えておけばいい」とコメントしている。『三木清全集』第19巻、292ページ参照。

だった。しかし、敗戦国ドイツのそれは激烈さとラディカルさにおいてまったく次元を異にしたものである。新カント派哲学のさらなる吸収をめざしてドイツに赴いた日本の留学者と、彼らを受け入れたハイデルベルクの知識人たちをそれぞれに規定する思想文化史的コンテキストに大きな差異があったし、それはまた当然のことだろう。そしてこの差異にもかかわらず、いやむしろこの差異ゆえに、多くの日本人がハイデルベルクに赴いたとすれば、差異の実質をさらに具体的コンテキストに即して再考することが不可欠である。

ハイデルベルク大学に残存する日本人研究者からの書信はほかにもあり、その全体像の検討はまだ緒に着いたばかりだ。調査範囲をさらに広げれば、他大学の図書館や文書館からも新資料が検出されるかもしれない。すでに多くの事柄が語られてきた日独間の文化的交渉について、ドイツに残存する資料を参照することは、留学者たちを迎えた側のコンテキストのさらなる検証をうながすであろう。さらに、留学という文化翻訳的行動の社会的な意味を検証するという方向を探るとき、日独間にとどまらないより複眼的な比較研究もまた待たれるのである。

(みに・けんじ 大阪大学人文学研究科教授)